

別当の坊より饗応にて御酒宴有 遠侍所には 諸大名烏帽子を傾け
 並居たり 箱王丸は傍に立休らひて 鎌倉の案内知りたる法師を語
 らひ 諸大名の家名を聞 先一番は畠山次郎重忠 向□は和田左衛
 門義盛 三浦別当義澄 上総介広常 千葉之介常胤 又 中老の座
 上は梶原平三景時 仁田四郎忠常 天野左衛門遠景 小山左衛門朝
 政 其次に 庵りに木瓜の直垂着たる白き男の 大にふとりたる男
 は 工藤左衛門祐経と教けり 扱 工藤は三十歳計りに相見え 当
 時出頭の切り人也 箱王丸 俄に胸轟きて 扱も ふとりて切ご、
 ろよさそふな男かなと 言へり 教たる法師驚きて 爰な児は訳も
 なきこと云給ふものかなと 言へば 箱王は利発にして いやく
 能ふとり給ふ人故申たるぞと 打笑ひ 暫く立隠れ 箱王丸も心底
 思ふは 誠に 父の仇に逢は優曇華の また逢ひ難きものと聞く
 何程の事やあらん 伺ひ寄りて 只一刺しに突殺さん 若年にても

腕に覚へはあるものと 守り刀を引そばめて そろりくと立廻
 りて 工藤が後の方に立廻る 時に 仁田四郎 早く見つけて 小
 冠者は何□□ 不思議や 常の人に非ず 我□一類成し 過去られ
 し河津三郎に面影似たる冠者かな 此方へ参られと 小腕取りて引
 寄る いかなく 盤石のごとくにして 扱も剛力也 仁田大に驚
 きて 手持無沙汰に離れけり 箱王丸は次而悪し、と 立隠れけり

付記

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜りました宮崎県立図書
 館に、厚く御礼申し上げます。

〔平成八年十二月十日受理〕

箱王は十一歳のとき出家して 亡父三郎殿の菩提を弔ひて 父母の前にて 云含められたり 幸 箱根権現の別当阿闍梨が行実は 故

河津の別離の□也 三郎殿とは入魂に有し人なり 旁 疎略は有べ

からず 箱根登山に極りけり 此節 兄弟 一間成所に密に寄合て

相談す 如何に十郎殿 我出家せば 父の仇討ことは差留らるべき

を 幼年之時より思ひ込んだる事なり 今父母の命を背くことも迷

惑なり 如何すべきやと言ふ 十郎聞て 先登山して 箱根にてあ

そび給へ 急に法師になるべき□□□ 早く迓来り給へ 何しに父

上の仇 其俣に可差置や 穴賢 色にも出し給ふなど 十郎が教た

るを 鬼王 団三郎は立聞したるとや 去程に 団三郎は箱王が従

者として 相共に箱根へ登山しけり 此節は鬼王は十八才 団三郎

は十七才なり 箱王は十郎が仕へにて月日を送りけり 只 成長の

月日待 此内に 十郎は鬼王を相手として剣術の修行 弓矢武芸

の事より外は他念なし また 曾我殿の介抱にて 馬一疋 下僕四

五人召仕 鬼王を一の臣下として月日を送り 箱根へ一日鬼王参れ

ば 一日は団三郎 曾我へ来り 兄弟 日々に音信 誠や 不思議

の信節の面々也 五郎は至て律儀なる生れにて 幸ひ霊場の山に住

甲斐にとて 法華經を習ひ□□度／＼参詣 一度も怠らず 只

父の仇工藤を討たむとの立願ばかり也

頼朝箱根登山 工藤供奉之事

文治二年正月廿日 鎌倉殿 箱根 三島社参の事有 箱王 此時

十三才也 大に歎び 是天の与ふる所なり 定而 工藤も御供に

来るべし 仕合よくば刺し殺すべし 又 首尾あらば 可見哉と相

待こそ久しけれ 正月廿日 鎌倉殿 権現に詣で給ひて 神楽奉幣

あり 神前には 頼朝御座す 北条 土肥も並びたり 神拝終り

三浦の後室は伯母なり □□□合力養ひは可有也 畠山殿は 父

河津殿の為には何にても有や 一門はどれ程の縁有やと 鬼王答て

畠山殿は別して御血筋も無し 御一門並にして 常々御入魂也 宜

御礼申上給へと 喜び限りなし 箱王聞て 我等兄弟 浪人の身

不自由也とて 筋目なき人の合力は請まじき也 養父祐信の養ひ不

足 土肥 三浦が介抱少なくて貧窮ゆへ 他門の養ひを受くなり

近比残念 畠山殿の音信入らず 人の介抱返弁申と 押まくりて

本田に打付けてけり 本田帰り □ 畠山に申す 重忠大に感心して

誠に獅子の子也 幼年にて 箱王が心底 武門の義理 勇猛 天晴

希有の若者也 行末如何 不思議の若者 さても不便の心底かなと

五郎は殊之外 重忠心底に思われける □ 勇 別て同気相求るの天

然の理なり

十郎祐成元服 五郎箱王登山之事

河津殿の後室 月日の過るにつけて 工藤左衛門は祐泰の仇敵な

れば 討むくと思へ共 祐経は世盛りの躰なり また 流行に親

と子の間 不便さも 成長したらば 曾我の介抱 土肥 三浦の取

持にて 父の本領にも有付もやせむとの心いれゆへに 敵を討事 □

弱りはてたるや 又 後室才智発明にて 一定 兄弟に工藤を討す

べきと思ひ詰て 曾我の家に崇りの出来ざる様に 却て五郎を戒め

て 益強く心に思ひ込せんとの事必定なり 此故に 先工藤に安堵

さすべきと 次男箱王丸は出家さすべきとの事は 折々 曾我太郎

に申頼る、斯様の □ 共 一万丸も十三才に成 おとなしく 祐信

一家を会合して祝言し 一万丸の髪をとり上げ 烏帽子着せて 父

河津差料 遺物の太刀を渡 □ 名字は曾我の家督を継給へば 曾我

太郎を烏帽子親として 曾我十郎祐成と名乗て 男になりたり 扱

相手なれ 此鬼王 団三郎兄弟は 一万 箱王より五ッ六ッ歳上なれば。 日夜旦暮 主従四人 此事のみ也 実や 勇士の一筋に思ひ

詰たる事なれば。 左もあるべきこと也 曾我祐信 折々来りて 子

供の慰に破魔矢の如き弓を参らせ 或は 竹刀 木刀などあてが

ふて 武芸も自然に□□する 曾我の心底にも 兄弟生立も 心□

□る有様也 また 土肥二郎が常々合力□て 兄弟を見継ぐ 畠山

次郎重忠は 兄弟の武勇の志を感じ 常に 本田 榛沢を差越て

□□ことの音信も 只偏に渠等兄弟□□年□□ 敵を思ひ込むだ

るを不便に思ひ□□は 実は 曾我太郎の妻に非ず 朋友の実儀

勞り迄の信実を感じて 念比に被致たり 今はや 彼是の養ひに

て 一万十三歳 箱王は十一歳になりにつけり

土肥 三浦は 曾我兄弟の近き親類なり 土肥□兄弟が祖父なり

□太郎は伯母禪也 三浦の妻は大伯母なり 彼是之養ひにて 不自

由にもあらず 陰徳あれば □□□□□や 自然と曾我太郎貞心を

諸人聞伝へて 然らば河津の後室も さも不自由の事も□□□有と

常々 □音信もあり 爰に畠山次郎重忠は 弓矢取て 和漢に秀た

る良将 殊に 勇義大力の人也 曾我兄弟之事を深く不便に思ひ

別して 五郎時宗は身に替へても□ひ給ふ 十郎 五郎が夜討之夜

も 家臣本田□を案内に出し □夜の介抱大方ならず 其子細 根

元の思ひ入は 十郎十三才 五郎十一才の比 家人本田 榛沢を折

々差越て 無事を尋給ふも □に兄弟は孤同前なり 殊に 曾我太

郎は小身なり 介抱も心元なし 此時 本田次郎を使として 兄弟

の□□領として 金銀を送り給ふ 信実也 兄弟の人に重忠の口上

を申し述 何にても所用は一々承る間 無心置申越給へと 誠に念

比の事なり 此時の悦は鬼王 団三郎也 常々 不自由の事也 悦

て取納むとす 箱王尋るには いかによ 鬼王と 土肥殿は祖父也

かたなし 然るに 去治承年中 頼朝義兵を上給ふ時 叔父工藤介

茂光 并 祐経が弟宇佐美三郎祐茂 相共して参上せしかば 頼朝

の御陣に 彼等有之由を伝へ聞て 寿永三年の冬 都を落て 伊豆

に下り 宇佐美にありて 頼朝公に願けるは 伊東が家筋断絶の儀

を歎きけり 右大將家不便に思召て 召出され 近習に仕へけるが

公家 武家の古実に詳しく 都の沙汰 小松殿の風俗を覚へて 朝

夕勤仕するに 利発ゆへ出頭して 伊豆国伊東の領主に補せられ

其上 従五位左衛門尉に任じて また 伊勢国飯野郡を一凶に給

□□を府中に構へ 大身になり 威勢 鎌倉に肩を並ぶる人なし

しかれども 天性佞□の祐経にて 時の出頭 梶原に取入て 内縁

をとり 旁 諸人の憎み者にして 別而武勇のことなく 戦場の辛

労もなく 唯 □鋪の上の出頭にて 日に余る大名にて 式万町余

の領主 当代廿万石に相当べし 大果報の祐経が有様なり

一万 箱王稚立 畠山重忠入魂之事

去程に 河津三郎祐泰の後室は別家を立て 朝夕の賄ひは 曾我

太郎□尋常の□□にて □人も彼是あつて 一万 箱王も此所に生

立□り 既に一万□は拾歳になり 箱王は八歳の比 □□事を止め

て 父の仇 工藤を討たむとのみ 兄弟 朝夕物語にも 父上の事

を申出て いつか人並に成長して 工藤を討たむとの事のみ 里の

友を追かけ 或は 曾我が家来の子供迄 工藤よ 祐経よと追かけ

人を組伏 打擲す 中に箱王丸は 力量大に勝れ 今は人々の□手

に持て余し 母は大に悲しみ かゝる兄弟の介抱は 曾我太郎殿の

高恩なるに いかなる□事や出来 必ずよ 兄弟の子共 父上の仇

は大見小藤太 八幡三郎也 彼等ははや討れたり 必 よしなき禍

給ふなど 制せらるれども 一万は能覚へて 箱王よ 左にあらず

御身と我も 仇は工藤左衛門也 是非可討ぞと 鬼王 團三郎こそ

安堵するとも 世の中 諸人 我を人とも思はず 後指をさして 聳

相舅の預して 命助る老法師と 童までに笑わるべきは 口惜き次

第也 又 平家小松殿の恩 山の如く □□ 今また 何ぞ源家に

恩免蒙らんや 此旨を可申上連 即時に切腹せり 時に七拾□歳な

り 実や 勇功□□入道なり 諸人も斯は思へども 流石に□□さ

るものなり 彼旨右兵衛佐殿へ申達せり 大に感心 誠に義心正し

き入道なり 如斯の子細なれば 何しに曾我五郎が心底に 頼朝を

恨み奉らむや 扱 伊東九郎祐清を召され 父死去也 其跡の遺跡

可給との事なり 然るに 九郎御断申条々は 親入道事 平家の重

恩を蒙りし事久し 此儀思ひ忘れず 公にも弓仕 此度も生害に及

び 只今 九郎本領安堵仕 栄華仕らば 父入道は武士の儀忘却仕

らず生害 其子是不孝不忠の人屑となり 父までの悪名なり 首を

刎られ候へと申次 頼朝聞召て 彼は我に恩有 命を召に及ばず

念頃に太刀 馬を給わり 平家に参り 軍忠を可尽とのこと也 九

郎祐清有難く御受 退去の節 一類狩野介に密に云は 我養子 河

津四男律師丸は出家にして 祖父の菩提を弔ひ候様にと頼み置けり

禪師房がことなり 九郎は都に上り 平家に従ひ 越中 俱利加羅

山にて戦死せり 誠に義勇の九郎 死後に功名高かりける 然ば

伊東が名跡 嫡流□滅して 庶流四男の家筋 工藤左衛門祐経こそ

残りけり 又 曾我太郎も 西国八島壇の浦の戦ひ終りて帰陣 曾

我の里に帰り 国家恙く 滅亡 移り替り 鎌倉殿の代となり 天

下静謐 波風もなく 万民貴楽に諷ふ世の中なり

工藤左衛門祐経が事

仰 工藤左衛門祐経事 都にありて 小松内大臣重盛公に任へて

出頭し 又 其身發明にして諸芸に達し 時切り人也 繁昌いわん

ば。愚昧之老法師に候へば。実平別而不便に存候と。偏に願ひ奉る

頼朝聞し召て。暫時。返答もなかりし。良有て。被仰は。実や。伊

東入道は別而仇敵也。我を可殺事度々。殊に我を害するのみならず。

我妻子を殺せり。旁。遺恨深き入道なり。然れども。河津三郎は親

敷無双の勇士也。我にも度く義兵をすゝめ。勇気を勵し。常に入

魂に音信あり。其事を今思ひ出たり。いかにや。三郎に子供はなき

やと。尋給へり。土肥次郎思ふは。□悪しく取廻さば。結句死罪に

や逢は□と疑ひ。幼年の子供候けるが。今程は。伊東が家筋を離れ

て。曾我太郎が養子に罷成。母と相供。曾我に罷り有候と。申上

此時に浪人と申さば。必ず本領の半分も給るべきに。残念也。斯て

頼朝。暫く思惟ありて。とかくの仰もなく打過給へり。時に。寿永

元年二月十四日。三浦介義澄を召て。汝が舅。土肥が相舅。伊東入

道は。年来の仇敵といへ共。土肥。三浦□忠誠拔群□。其上。九郎

祐清。我に案内して助命する。また。河津三郎□常く入魂忘れ難

く。彼是。昔の忠を感じて。今。入道が一命を赦免する条。已来

別心あるべからず。此上は。伊東本領。宇佐美。久津美。河津。舟

木。伊東。残らず。安堵相違なきの旨。御下知文給は□。急ぎ。只今

入道を召具し可来也。我また直に。恩赦すべきとの事也。義澄感涙

を流して。急ぎ宿所に帰り。入道に對面して。斯様の儀なり

難有□□処に出給へと。言ふ。入道。早速には御受も申さず。暫く

思惟□。我此躰になり。老命を惜むに似たり。乍然。貴命黙止がた

く。余追付。御館には参上可申也。先達而。貴殿は御前に被参よと

言ふ。三浦介。然らば。先へ可参と出たり。去程に。入道は義澄が家

の子。郎等と呼て申聞するは。扱も。右兵衛佐殿より。助命本領無

相違可給との使節なり。つらく思ふ□。我は佐殿の□敵なり。殊

に齡七旬に余り。□程の老命を助らんや。又。仮令命助り。本領に

曾我物語に書たる五郎時宗敵討□□ 十番切之後に 唯一人 御

狩屋之館に切込て 生捕られ 頼朝の前にて 親の敵を討ちたるは

神妙なれども 何とて頼朝が狩場□陣屋へ狼藉したるやと 御尋の

とき 五郎申は 君は正しく祖父伊東入道が敵なり 一太刀可奉恨

と書たり 是は跡形もなき虚事也 曾て左様のこと非ず 祖父伊東

入道は 深く頼朝の恩を受けたり 又 曾我兄弟□□□□出し可

有との沙汰有之 雖然 父の仇工藤を可討と思ふゆへに 伺候不申

斯様之儀なれば 五郎心底に 何迎可奉恨哉 ひとへに工藤が嫡子

犬房丸を可討とて 尋たるなり 其儀の□誤り 畢竟 時宗 只勢

ひに乘し□の働也

伊東次郎祐親入道寂心 生害之事

世替り 時移りて 頼朝義兵を起□□ 石橋山合戦の後 安房

上総より廻り 武蔵国に出□ 大軍充滿□□ 段々に軍勢□ひ集り

既に駿河国富士川にて 平家の大軍を追□し 其身は鎌倉に引返し

て 既に天下吞却する勢ひ 敵共皆降参す□に 伊東入道寂心は生

捕と成たり 一家なれば 狩野助に預らる 二男伊東九郎祐清聞て

父と同事に死罪を蒙るべきと 仁田四郎忠常が方へ来り 父子共に

囚人に成たり 今見る時は 曾我太郎祐信は 河津が子供兩人を養

子に引取 曾我 源氏の味方なり 是天然と 兄弟命を継の天の幸

ならん 去程に 伊東入道は 頼朝に深く御敵仕たる者なれば 一

定死刑に可被 斯之處に 土肥次郎実平 三浦介義澄 狩野助 御

気色を窺ひ 伊東入道赦免の事を偏に願奉り 土肥次郎が為には親

敷入道にて候 彼が嫡子河津三郎は某が聶にて候 また 我等嫡子

□太郎は河津が妹聶にて候 此三郎祐泰存命に候はゞ 此度君の御

用にも可相立者に候へども 早世仕り 旁以て 河津が父にて候へ

に 母上も憂き事□ 思ひ煩ひ 工藤左衛門は当時鎌倉殿の出頭に

て 大名なり 中々叶ふべからず 刺 憂き目にや逢むと思ひ 繼

父曾我太郎を頼て 出家さすべきとの事也 此□に 河津殿の人魂

なりける程に 箱根権現の別当を頼みて 登山致されけり 爰に工

藤左衛門は 当時右大将家の出頭に 知行□ 覺敷有ける 或

時 鎌倉殿 箱根参詣の供奉たりしに 箱王丸 人に尋て 祐経を

見知 刺殺さんと窺ひ寄る 諸人に見咎られ 其上工藤に對面して

赤木の柄の短刀を貫ひ 此刀にて後 工藤が止めを刺したりけり

兵書云 凡 人以信義報之以礼 此語は□の中の□□ 義と信と

は朽ざるものにして いかなる下郎 □賤のものにても残れり 雖

然 □□程に我誠を尽しても 他人の方より誠を尽すものにあらず

例ば 下賤の詞に 売り詞買ひ詞といふ如く也 何様の事ありとて

も 先より仕方によらず 信もあるものなり 又 憤ることも有

或は 主君に忠義を尽す 報之に禄を以てす 父母に孝行の誠を尽

す時は 天道必幸福を与へ給ふ 他人に信を以て交ときは 人また

礼を以て報之 我は信□ 人にはかり 信を尽せと言ふて□

可叶 又 人の無沙汰 疎遠を咎め 怒るは如何ぞや 人疎遠の時

は 我方より音信て 其よしみを結ぶときは 何か子細あるときは

格別 すべて 面伏せ成はあるまじきこと 武門の義理は 兎角

恩を見て恩を知らざるは 是畜類なり 忘却すべからず 伊東九郎

は 頼朝□前方に奉助 是□に 父祐親に敵討するに非ず 只愛し

さの仁愛にて助け申たる也 頼朝此義を思し召し 又 故河津三郎

が入魂を思ひ給ふゆへなり 雖然 伊東九郎は平家の恩を思ひ 父

が大義を感じて 終に頼朝の免許を受ず 死刑を願ふは誠也 仗て

頼朝 また 斯の□□ 不便□□□許して 平家の方へ行かし

むる 是其まことを感ずるゆへなり

隠れ居たり 網代は表□□来り 八郎よ いかに見□□は 火をか

曾我根元評判大全 卷之四

けよと云 心得たりと 家内□□撫切にして 即時に火をかけて焼

け□る 火の明かりに 松の木の上に人見ゆる 小仲太見付て 八

本章

郎よ 敵は松の木の上にあり 射落せよと 言ふ 心得たりと 弓

時替り 代も移 頼朝義兵を挙げ 石橋山合戦已来 大軍競集り

引詰て 後脇に腰より腹へ射抜たり 落る所を 八郎首とりて 先

既に御敵降人 或は 生捕に来けり 伊東入道祐親も 既に生捕れ

河津殿の百ヶ日に御墓へ参りて 兩人の子共へ遺言して曰 兩人

けり 然るところに 土肥 三浦 伊東が助命を願ふ 河津三郎存

兄弟の約を勤めて 御兄弟の主君へ 忠節すべしと 河津殿の御墓

命のとき 深き志を思召て 本領安堵あり 入道信義を立て 自害

所へ香花を供へ 差違ひてこそ死失けり

す 此河津が子有とは 右大将家 兼而御存有けり 又 伊東九郎

は北国にて討死す 亦 曾我祐信は 蒲冠者の手に属して 西海に

陣立す 其間に 一万 箱王丸は夜日に増し 力量拔群に勝れ 近

辺の童共にても見ると 仮初の稚遊びより 仇工藤を見付たり 兄

上 いざや討むと 押し伏せ投げすへ 数逸にこそ有ける 七八歳

の時の力量こそ 究竟の壮年の老□にも勝り 日夜斯の如く ゆへ

咎もよしや有べし 又 譬はあればとて 助け置べきにもあらず

□□と 密に闇討にして 其仇の知れざる様にすべし 先 彼に油

断さすべ「き」なりとて 誰言ふともなく 河津殿 闇討におふて

敵も知れずと披露して 暫く日数を過て 人を付て窺へば 大見

八幡も油断して 此頃は三島へ遊□に出でて留守にて候 今は帰り

て 着宿仕との注進なり □させ給へと 二人の者□□□□に□

尤成かな 彼等兩人が子は 鬼王は網代が子也 団三郎は八郎が子

也 後室の曾我に□□られ □なればとて 彼等武人を兄弟の

約をさせ 曾我□□□ 大見 八幡を討て後に 河津が墓の前にて

自害する大忠義の兩人 是 偏に 河津の仁愛に寄もの也 去程に

□は神□を学ぶといふ 八幡三郎は□□□にして勇強也 大見は臆

病也 □□さゝる様に相詰よと 二手に分る 松原八郎を大将とし

て 兵士廿人 雑兵五十人 大見の里に忍入 又 一方は 伊東九

郎を大将として 網代小仲太 并 兵士廿人 雑兵五十人召共し

八幡の里に押詰て 四方を取囲で 鯨波を上たり 八幡は 強之者

にして 弓勢の達人也 少しも臆せず 行氏は 即時に表へ走り出

て 一族十人計前後に立て 三郎が兼て待設たり 覚悟の前也 □

□□□同道になり給へと 矢束解ひて押乱し 射たりけり 雑人六

七人迄射倒しけり 然りといへ共 大勢也 網代先へ押込んで 一

族大概射死したり 八幡はいまだ手も負ず働たり 網代小仲太 弓

矢とりて 主人を射た□□□□と □張 十三束引詰て射たり

お□□□□に 背骨の上を射抜□り 二言共なく倒れたり 小仲太

走□□て 取て押さへ いか八幡 よくもく河津殿を射たり

天罰也と 首打落して思ふ□にしたり 雑人は打払ひ それより直

に 松原八郎方へ見廻て 百人計り走り行 松原八郎は大見が館へ

押入て 鯨波を上たるに 大に驚きて 庭前の松の木の上に上りて

立 後室は別屋を立て 我深く信義を□□べき也 是誠に武士の義

なるべしと 急度思案して 入道に返答申けるは 相心得て候 幸

ひ □倅にも妻にも離れ候へば 此度同心して 曾我に可帰にて候

伊東入道聞て 大きに喜び 河津が後室にしかくの旨を書贈れり

此際 曾我太郎より 河津の郎等 網代小仲太をもつて 後室へ心

底の段を申し送り 此故に 後室も子の不便 また 成長以後に父

の仇を可討との事 心底に歎び 再縁せられけり 外目より見ては

誠に 無常変化の世の中也 □るをも知らぬ世の習い 昨日は今日

の夢なりけりと 爪はじきをする輩もありけり 然りといへ共 曾

我太郎は貞実の人にして 別殿を建て 河津の後室を入置きて ま

た後室は 曾我の里の外に □村有 屋敷を構へ なる程 尋常に養

ひけれ それに人を付 一万 箱王を念比に生立 我子として成長

以後に工藤を討すべきとの心底は 誰知る人もなかりけり 疑ひも

なき證據は 河津後室 廿七才にて曾我へ行 以後 子といふもの

なし 河津の子供四人の外に持ざりけり 壮年 女中に不実不足は

眼前なり かゝる義心の母□ 朋友の信を守る曾我太郎が大義の心

底の間に成長したる曾我兄弟の事なれば 悪しかるべき□□あらじ

実や 友達の交りは斯様にあり度ものにして □に大義の曾我太郎

祐信なりけり

網代小仲太家信 松原八郎家重 大見 八幡を討事

河津三郎が郎等 網代小中太 松原八郎は 河津殿の葬送過て以

後に 伊東九郎に申□ 我君河津殿の仇敵は工藤也 差当る当の敵

は八幡三郎が射たる矢也 祐泰の御最期□も 大見 八幡同道にて

八幡が射たりと仰られける 誰彼も□□ 小仲太□□ 然上は

是非に 大見 八幡を可討にて候 皆是 兄の敵 主人仇 公務の

師丸と名を呼たり 此子成人して禪師□と申し 箱王丸が弟也

去に無常も重なり 父の伊東入道して 寂心と名乗りて 家督は次

男の九郎祐清に譲りけり 河津の後室 既に尼とも成て身を逃んと

しきりに申給ふ 時に寂心入道□□ 気の毒に思ひ 誠や 御料は

姿をかへ給はんとや 二人の子は誰に預けて かくは□り給□ん

此子供兩人 生立給は 嫡子三郎が子也 一「万」丸拾五歳にも

ならば 祖父隠居して 一万に養はれ 老を楽しむべし 今出家し

給は 式人の子供 立処に孤となり□べきと 父の申さるゝ 流

石に稚き者を捨てもやら□ 過行月日をぞ送りける 爰に 河津三

郎が無二の朋友 兄弟同事にむつまじく交り 幸□人に 曾我太郎

祐信は相模の国の住人にて 河津の□□従弟なり 曾我の里とは一

日路を隔て 互に□□ ひとへに水魚の交り也しかば 今此太郎が

歎きに□恋人の様に覺たり 伊東入道 工夫をするは 曾我□去年

の春 一子に離れ 又 夏の□□妻に離る 是 奇なること也とて

曾我太郎を呼寄て 河津が後室を後妻として 二人の子供を養ひ給

へ 伊東も□様に相談可仕と申し 曾我□□て 氣□貞心にて

古今希なる義の正しき人なり 世間に云 河津後室は天女成に依り

て 恋慕の人あり故 同意の様に見ゆる 全く□□成不所存の人に

あらず 曾我太郎 常に思わるゝは 我旧友の交り親しき三郎が□

を繼 仇工藤を討んと思ふ程なれども 幼年にても 一万 箱王兄

弟有 又 伊東九郎有 一□□□て 我工藤を可討理にもあらず

又 入道寂心 家督は九郎祐清に譲りたれば 既に一万 箱王は孤

独の みなし子也 扱も便なき事也 彼の兄弟を育みて 父の仇を

報じさせ 朋友が交の誠を立ん 又 後室の事は 念比なる朋友死

て跡に 再縁す□□ 偏に密夫同然の不義なり 人の評判は如可様

にもせよ 子共の為なり 妻女に迎ひて 二人の子供養子にして生

より鳴声うるわしくと 況や 汝等は五才 三才なり 父河津殿は

工藤左衛門祐経が所為にて 如此射殺され給へり 成人して拾五六

才にもならば 親の敵を討 父上の妄執を晴らし 母□歎をも救ふ

べし 凡 人として 若父の仇を□□□は 相共に天日の光りを戴

かずといへり 今は幼稚にて 何を言ふても甲斐なき子共やと 繰

り返く歎る、 実や 梅檀は二葉より香しく 一万丸は箱王丸が

手を引て かいくれにみへず 表へ出にけり □□よくと相尋る

に □形の外面に出ける 家人松原八郎驚き 走り出 をし抱き

是は□□□□□も折によるものなり 何方へ出給ふぞ と言へば

一万丸は五才なり 常□□□おとなしく □八郎も来れ 父の

仇工藤左衛門と聞 父上の仇を討也と 箱王が手を引いて 都迄尋

行かんと□ 八郎も□れ 母人には隠せくと 申されける 守人

大に驚き 扱恐しき子や 末頼敷哉 父の敵は一定可討子共哉と

見る人 聞人 大に是を感心す かくて 伊豆国愛沢□に奔道の事

も終りて 此以後には 日夜旦暮 一万丸は三才の弟にひたと智恵

を付け 五歳なれ共 □□の発明にて勇氣有 此ときより思ひ込ん

□ 十郎廿一歳 五郎十九歳にして 終に仇敵工藤を討たりけり

河津後室 曾我太郎に再縁之事

実や 浅間しき世の中 河津が妻女 四月十五日の夜 男子を産

めり 夫河津死して漸五日過たる計り也 母は大きに憂事に思ひて

父存命の内にも生れず 前生の因果悪しき子也 母は尼にもなりて

夫の菩提を弔はんと思ひ詰たり 今汝を儲も 何の悦有ん 身の果

報を恨めと 既に刺し殺さんとし給ふ時 河津の弟 伊東九郎 無

理に養ひ取 生立て出家にすべきとて 一向に被申し故 また□殺

□不便にあり 伊東九郎に参らする 迎も出家すべきなりとて 律

小藤太 八幡三郎兩人なり 只当の矢射損じたるこそ口惜□ 彼等

一万丸 箱王丸が事

兩人 我に意恨可有様なし 祐経が所為なり 祐経こそ仇敵なれと

儲 可有にあらざ 面々饗応の戻り□ 興尽き果て 各皆 分国

思ふに □□もなき兩人の子共幼稚也 成長以後に 父宿意を達し

領地へ戻らる、 伊東一家の人々も 河津が死骸を搔連て 本所に

工藤を討て 冥途の闇を晴らすべし 扱 大見 八幡は当敵なれば

帰らる、 □□□の□も 親子□□の間□也 母儀 并に 河津が

舎弟九郎 □□も 下知を伝ふべし 我に譜代の家人綱代小仲太

内室立集ひ 又 日比 河津仁望の人故に 賤の家僕まで差集ひ

松原八郎家重兩人 是を討べし 扱 父上は矢にも中り給はずや

大に驚き悲しみ 扱も 仏神の加護もなきやらんと 歎きける 河

是迄 某存命の内には 跡や先 陰や日向になりて候が 元来心が

津三郎 子息三人有 一は女にて 相模国三の宮太郎朝忠に嫁すべ

情なき人 例へば 忝くも三浦殿 土肥殿を奉頼 外には可申□□

きとの約束有 二は一万丸 三は箱王丸とて三人也 此子出生し

なく候と 今年三十三才にして 赤沢山が麓に果にけり 誠に可惜

□□に替り 目鋭く 骨組荒く すさまじ 生れ付也 □故 父三

く 無双の勇士也ける 凡 闇に害する者は防なり 例へば

郎愛子にて 天竺の白沢王の化身なりと □□の詞とぞ 出産以後

虎狼の猛□に向□□□□の□せき有 只佞讒の人のする所也 祐経

に白沢王□と呼ばれる 世□評を憚りて 箱王丸と呼ばれけり 去程

は己は京有 人知らず 密に家来に仰せて 宿意を達す 偏に野狐

に 此子□□の母は悲しみ耐へかね 兄の一万丸は枕元に置 箱王

の恨みを返す□□とく也 只可恥は佞人なり 可惜は身の守り也

丸を死骸の懷に抱かせて申されけるは 子共承れ 頼伽鳥は巢の内

□□□たりけり 河津は名高き大功の□□□ 少しも疑ひもせず。

弓矢おつとり直し 馬引返し 大見 八幡をきつと見込 弓矢引起

して引かんとしけり 心は丈夫なれども 流石に大事の痛手なれば。

勇 大に絶へて 馬より真逆様に落たり 跡先の郎等共立寄て い

かにくと言へども 詞もいはず 只あきたるばかりなり 是の

みならず 大見小藤太 跡より走り抜て 伊東次郎祐親 時雨に馬

をはやめて来る所を 引詰て放つ 矢つばを前輪にはつしと立 祐

親□□□たる左矢に 二の矢を射られじと 態と馬上より落て 家

人□に呼わらせ 山賊有 後陣続け 先陣返せと 大音に呼わる処

に進んだる糟谷 渋谷 跡に続たる土肥 土屋 一時に組合せ

追かけけれ共 □□ 岩尾に馬を扣て下知する内□□ 八幡は近辺

之林中^{江次}馳入て 行衛不知なりにけり 角て 次郎祐親を始 各□

□に集りて見るに 南無三宝 河津は虫の息也 諸方には土肥次郎

実平 三浦別当義澄 祐泰舎弟伊東九郎 郎等共也 父の伊東 余

りの事の悲しさに 膝の上に枕を乗せ 是やくと言へ共 一言の

返答もなし 伊東□□ 三郎よ 是程の細矢に中り 一弓の返答し

て死する事やある 誠に云甲斐なき者かな 日比は関東にて□神の

如くに言われ 其身が最期に悪しかりしと 云れんこそ口惜けれ

大剛の者と云れし□ 弓矢の恥辱 人口の嘲りも 誰とも不知哉と

云かかり 河津□□□聞へつるや 苦しき中 息を継 かすか成声

を出して 最初より被仰聞候へ共 誰ともさらに不弁 誰にて渡ら

□□□と言ふ 土肥次郎実平声荒らゝげ 能く聞給へ 枕に居給は

御身の父伊東殿なり 斯様申は土肥次郎なり 三浦殿 誰々もおは

し候 思ふ事あらば 心を強く□て 申給へ 敵は誰とも不覚哉と

言ふ 良ありて 三郎息を継 実や 土肥 三浦殿 名残惜しくこ

そ候へ 慥に聞給へ 残念に候 当の敵は工藤左衛門が家来 大見

ふ 眼をあけて庭を見れば 我が老母を狐と見誤り 走りかゝりて

□□殺せり 歳□□□ねにて 狐明て逃去れり 是非なき有様也

かくて評定有 心底には悪念無しといへ□ 親殺しの罪極りし 忝

人首を切らるゝ時に 此子細を□□□□て切られたり 是佞讒□人

皆此方如此也 □□□也 工藤が其身意恨是有は あと討果□

残念の□□也

河津三郎祐泰最期之事

去程に 古今希成相撲の興行終りて 河津は無双の名を顕し 上

下さゞめき とかく河津が相撲手柄咄にて 帰るさの道も唯此評判

計なり 皆□々不残伊東館へ集んと 漸日も黄昏に及ぶ比 面々馬

を立たり 第一番には波多野右馬允 二番は大場三郎 三番は海老

名源三 四番土肥二郎 五番は狩野介 六番は伊東が嫡子三郎祐泰

かくれも更にあらばこそ 狩り野□□□□に□□をかぶりたり 山鳥

の羽にて□□□ □矢を負たり 笛藤の弓を持 甲斐の国より引た

る 村雨といへる明ヶ六歳の□髪の□□□五寸の馬に 青貝紋の鞍

置て 主□聞ゆる馬の達者なり 郎等どもは 少し先□打せて 木

の根 岩根嫌ひなく 千鳥足にぞ乗りたりける 然処 八幡三郎

大見小藤太忍びに付 歩行きて 八幡心きゝにて 大見に向ひ □

□は脇道より走り抜 物陰より一矢に射落すべしと 谷の細道より

樵夫の通路を伝はり走りて 赤沢山の麓 八幡山の南の尾崎に至り

小松の陰より 椎の木三本小楯に取りて 矢つがひて 今や／＼と

待ところに 卒の乗来るを段々やり過して 八幡三郎精兵の手練也

椎□の二の月の陰より十歩計り進みいでゝ 三尺許りに指詰て 跡

の方より□□□ 矢を切て放つ 思ひもよらぬ河津三郎が鞍の後輪

より 山形を射は□□ 行簾の着際を前の方へぐつと射抜て 根本

鞍の輪より 根元深く前へ射抜たり 河津心は大剛の者 乗違ず。

根矢□□打□かい 大見 八幡を□と見込 弓引んとする□ 心逆

□□□馬より落たり 郎等原驚き 走り寄り 是非を尋に 詞は

なかりける 父の伊東も 八幡が矢を放て共 運強くして中らず。

かくて 土肥 土屋 馬を駈すれば。 大見 八幡は逃去りけり 父

の伊東 土肥 三浦集りて 河津を介抱す時 三郎祐泰 工藤が所

為也 当の敵は大見 八幡と見たりと 遺言して死せり 扱 その

儘におくべきに非ず迎 急ぎ。帰宿せり 河津に小子三人有 一は女

にて 二宮太郎の妻に約す 次に一万丸^{時に} 二男箱王丸^{時に} 三才 懐胎

臨月の子を残せり 誕生して禪師坊といへり かくて 子細ありて

曾我太郎方へ再縁して 右の子供□曾我に 生立せり

兵書 四明に害する者は□防べし。 闇にそこなふ者は□防と 此

□□□□と同前也 工藤左衛門祐経は口惜□心底の者にて 河津に

遺恨をふくみ □□□□とは思へ共 河津は無双の勇士 其上□□

繁荣す 旁以 是非に及ばず。は かく密に下り 久津見に暫く忍び。

普代の郎等八幡三郎 大見小藤太兩人に談して 河津を闇打にすべ。

し 祐泰無之時は我家督に成べしと 念比に申含て 帰京し□□

誠に悪念の強き祐経也。 是闇にそこなふ譬は 虎狼か猛獸□□前に

成□□□□□□□□ 又 道具をもつて殺すべき事 人間の知恵

もあり 狐の□□は□防也 是を佞人に譬へたり 世の中の佞讒の

人□ 自分は脇にのぞき 密に内々を以□人を殺して害をなす也

爰に狐の大に人に害をなしたるは 藤□の家人に和久彦八郎とい

ふ者。 母親を殺して刑罰にをふたり 其子細は 前方或夜 古狐を

弓にて射殺せり 男狐来て 死骸をくわへて去れり 此以後 毎夜

□狐来りて 恨をいふ事□ 覚ける□□□也 或夕暮に 庭前に

□□□□慰□□□ 彦八郎毎々の□□□夢□ 庭にて狐恨をい

翻刻『曾我根元評判大全』

卷之三、卷之四

後藤 多津子

凡 例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にハ ヴを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

翻 刻

曾我根元評判大全 卷之三

本章

斯て山路の酒宴も終つて 諸人帰路に趣く 一番に打たるは波多

野右馬允 其次に大場三郎景親 三番は海老名源三 四番は土屋四

郎 五番は伊東嫡子河津三郎祐泰 扱見事に乘たりける 誠に其日

の装束も美麗に出立たり 天晴武勇の若者哉 郎等は先に打せて

しづくと乗来れり 工藤が郎等 大見 八幡両人は赤沢山の麓

南の尾崎 松山の椎木の陰より 八幡引詰て射たり 河津が馬の後